

## 白秋アートギャラリー (14)

# 近代化の象徴

薄葉  
茂

北原白秋は詩歌で「近代の風景」を表現し、加速する時代の流れを肌で感じ取っていた。それを物語るのが「橋」についての表現である。白秋が四十四歳だった昭和四年刊の詩集『海豹と雲』に、東京の川に架けられた橋を描写したと思われる作品「鋼鉄風景」がある。

神は在る、鉄柱の頂点に在る。

神は在る、鉄橋の弧線に在る。

神は在る、晴天と共に在る。

神は在る、鋼鉄の光に在る。

神は在る、近代の風景と在る。

神は在る、鉄板の響と在る。

白秋の故郷、福岡の柳川は掘割が巡る「水郷」の町。堀割には木や石の橋が数多く架けられ、地域の暮らしを支えた。だが、東京で白秋の眼前に聳え立っていたのは巨大な

鋼鉄の橋。二十八行の詩の「神は在る」から始まる言葉には、このような橋が存在することへの驚嘆が込められている。「社会の近代化」とは一口に言い切れない心境だったに違いない。次のような二行もある。

神は在る、装甲車と馳る。

神は在る、砲弾と炸裂する。

白秋にとって、自然界に在る木や石に代わって橋に用いられる鋼鉄の硬く、鋭いイメージは近代化の弊害である兵器のイメージにも繋がったのだらう。鋼鉄の物体を見ているうちに、白秋の世界は宇宙空間へと広がっていく。

神は在る、天体は鉄鉞である。

神は在る、炎炎と熾つてゐる。

私が住む仙台市の市街地を蛇行する広瀬川には幾つもの橋が架けられ、約百二十メートルの広瀬橋は以前の橋が明治四十二年に造られた日本初の鉄筋コンクリート橋だといふ。実際は他地域にもっと古い鉄筋コンクリート橋があったように、競い合って近代化が進められ始めた時代を象徴する構造物だ。私は仙台藩祖、伊達政宗の霊廟近くにある約六十メートルの霊屋橋か、約二百二十メートルの愛宕大橋を渡って自宅と会社を往復する。今はいずれの橋も当たり前前に鋼鉄で、車が次々と駆け抜けて行く。白秋は人工的な物質に支えられて生きる時代が急速にやってくることに怖れを二十八行の言葉に込めたのかもしれない。